



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

荒井正剛：『地理授業づくり入門：
中学校社会科での実践を基に』（書評）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 智章 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/159233

書評

荒井正剛：『地理授業づくり入門—中学校社会科での実践を基に—』古今書院，2019，150p. 2,860円

評者が教育実習生として、附属竹早中学校において筆者の指導を仰いだのは2001年であった。当時は平成10年（1998年）に施行された学習指導要領で、方法知をいかに獲得するかが話題となっていた。こうした中、筆者が担当するクラスでは、グループによる調べ・発表学習が極めてスムーズに行われており、生徒がこのように生き生きと活動できるような授業を行いたいと感じたことを覚えている。こうした授業は筆者の長年にわたる意欲的な実践があつてこそのもので、今になって思うが、本書はそれら意欲的な経験をもとにした授業づくりへのヒントが満載された一冊である。

本書は2部構成である。第Ⅰ部では、3つの授業から地理教育の魅力や役割が示されている。まず第1章は「北アメリカの学習」である。北アメリカがなぜ巨大な生産力を持っているのかを明らかにするとともに、持続可能性についても考えさせる授業が示されている。筆者は、諸地域学習では、生徒が一定の知識を持ち、関心を持ちやすい北アメリカ州を最初に位置づけるという。経済発展という概念にも触れて、他の地域の学習にも生かすという意図がみられる。

第2章は「世界各地の人々と生活と環境」である。ここでは、グループによる調査・発表の活動が示されている。全ての発表が終わった段階で、地方的特殊性と一般的共通性に着目してまとめさせる方法が示されており、まとめの難しい調

査・発表学習のヒントになる。また、イスラームやクールビズの学習は、自分たちの生活を見直したり、異なる環境に暮らす人々への尊敬の念を抱かせたりすることにもつなげる内容となっている。

第3章は「アフリカ」である。途上国の学習は生徒にとっても教える側にとっても身近といえるものではない。しかし、ここではカカオやレアメタルなど、自分たちとアフリカのつながりのあるものに着目した授業が示されている。また、農村の伝統的な農業や青年海外協力隊員の言葉から豊かさや発展についても考えさせており、アフリカの困難さにばかりに目が向かないような工夫がされている。

第Ⅰ部の3例に共通して言えることは、「人」が見えることといえよう。ここでの「人」には2つの意味がある。まず一つ目は、学習している地域に暮らす人である。北アメリカの学習でも、アフリカの学習でも、そこに暮らす人の視点から地域を見ることのできる要素が入っている。こうした見方ができれば、経済発展や持続可能性という中学1年生には難しいと思える概念の理解にも近づくのではないか。また、二つ目の「人」は、授業を受けている生徒である。生徒の発言や問いがふんだんに盛り込まれており、生き生きとした授業の雰囲気伝わってくる。こうした授業を実現するために、著者は生徒の反応を常に予想しながら授業づくりを心掛けてきたのだろう。授業づくりの基本の大切さを再確認させられる。

第Ⅱ部では「地理授業づくりの基礎・基本」として、授業者が指導案を作成する前に心得ておくべきことがまとめられている。まず、第4章では、

必修となる「地理総合」の意味が、地理教育国際憲章や地理オリンピックの試験問題などから述べられている。そして、日本においてよく参考にされてきたイギリスのナショナルカリキュラムと、国民から人気の高いニュージーランドの地理教育について解説されている。こうした海外の事例からは「地理総合」の柱の一つとなるESDがいかに重要であるかが理解できる。

第5章では、地誌学習の意義が述べられている。知識偏重になりがちだと批判されてきた地誌学習だが、筆者の調査によると生徒からの期待は高い。教育的意義を発揮するためには「地域を学ぶ学習」ではなく「地域から学ぶ学習」にするべきだとし、そのためにどのような考察の視点があるかが述べられている。中学校の新学習指導要領では、世界の諸地域学習において、取り上げる中心テーマの精選とともに、地球的課題について考察し表現する力も身に付けさせることになる。時間的な制約もあり、指導する立場としては勇気をもって内容をそぎ落とすことに苦心することになる。考察の視点として挙げられている「地域的多様性・格差」「持続可能な発展」「相互依存」「共感的理解」は各地域の授業を構成する際に大変参考になる。

第6章では、筆者のイスラーム圏での経験やイスラームに対する中学生から大学生までの意識調査を通して、どのように異文化理解を進めていくかが述べられている。調査結果でも明らかなように、生徒はイスラームに対して一面的なイメージを持ちやすい。しかし、そのイメージを覆すことで、イスラームの多様性やムスリム・ムスリマの立場になって考えることができる。その際に語りを交えながら学習を行うことにも効果がある

という。授業者自身が見分を広げ、異文化理解を進めていくことが重要だとのメッセージにもとれる。

第7章は、地理的センスの育成についてである。ICTの発達によって様々な情報が手に入る中、そもそも何が地理的なセンスなのか改めて考える時代になっているのではないか。その中で、地図・地球儀・統計・景観写真・フィールドワークという以前から活用されている方法について述べられている。特に、「宝の山」だと述べる地図帳の一般図の活用について興味深い。一般図は、地名探しや自然環境を見るために用いることが多いと推察されるが、中学生の地図帳には産業を示すイラストなど、生徒の興味を掻き立てるような要素が多い。様々な発見はその後の授業展開にもつながる。Googleをはじめ、様々なWebの地図に触れることが多くなった中、従来から用いられている教材や手法に改めて向き合ってみるきっかけになる。

最終の第8章では、地理授業構成のヒントとして教材研究、単元構成、展開、年間指導計画をどのように作成してくかが書かれている。生徒の実態、社会情勢などから地理の授業は教科書通りに進めることが難しい。これらが、地理授業づくりの難しさであり面白さでもある。教科書通りではなく、授業者の問題意識と生徒の実態を掛け合わせて充実した授業づくりを行うことの重要性を再認識させられる。

以上のように、長年現場において多くの生徒と多くの学生(実習生)を指導してきた筆者だからこそ、生徒や実習生がつまづくだろうポイントも抑えての1冊である。評者も日々授業づくりには悩む立場である。その立場からさらに欲しかっ

た部分を強いて挙げるとすれば、評価の部分である。深い学び・パフォーマンス課題などが必要となる中で、それらをいかに評価していけばよいかは同じ立場の多くの人を持っている悩みだろう。筆者の経験ではどのようにしてきたのかを知ることができれば、さらなる授業づくり力の向上につながったのではないだろうか。だが、こうした点は本人に直接伺うことにしたい。この書評を読まれる多くの方は直接筆者にお会いする機会も少なくないはずである。本書を手にとって、疑問に思ったことなどを直接聞いてさらに授業力の向上につなげることをお勧めしたい。

(佐々木智章 : 学部 51 期・院 37 期 早稲田大学
高等学院)